

---

夢

佳生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢

### 【Nコード】

N9812B

### 【作者名】

佳生

### 【あらすじ】

それは実際に僕が見た夢の話……

どうしてそこにいたのかは分らない。でも、どうしていたのかと問われたならば答えられる。

大人数でわいわいと盛り上がりながら、長い長い道を歩いていた……と思う。

今は一人であるのだけれど。

道から外れた向こう側に見える光を追いかけて、ふらふらと人々の中から抜け出た僕は、道を、森の中にある公園を歩いていた。くねくねとした、けれども歩きやすい道。

どこまでも続いていく道は、光がある事で人を惹き付けているようだった。

だったら僕は、それにまんまと引っ掛かった、馬鹿な虫ということだろうか。

けれども興味を持ってしまったからには仕方がないじゃないか。僕はここを歩いて行く。ずっとずっと、光に届くまで歩いて行く。しばらく行くと、僕はあることに気がついた。

最初は一つだと思っていた光は、実は二つあった。

手前には大きなぼんやりした光。遠くには小さなけれどもはつきりとした光。

その光のおかげで、この森の中の道は、明るくはないけれども暗闇ではなかった。どうして道だけが輝くようになっていたのか不思議だったが、そういうことらしい。白っぽい砂を固めて作ったような道だから、大小の光を反射して淡く輝いている。

僕が歩くには綺麗すぎる道だった。

ただ歩き続けているだけだというのに、ここまで罪の意識を感じたのはどうしてなんだろう。だって僕は特に何をしたわけでもないみんなと歩いていただけ。

みんなって、どんな人だっけ。

そんなことを考えてしまうのも、きっと道を歩いているからだ。目的もなく目標もなく、ただひたすらに歩き続けているからだ。行くべきところがあるなら、きっとこんなことは考えない。

僕にとって、そのみんなという人は、どんな意味を持っていたんだろう。

なにも浮かんでこないということは、どうでもいい人たちだったことだろうか。

いやいや、ちょっと待て。それはないだろう。いくらでもそれはない。僕にだって、どうでもよくない人の一人や二人はいるはずだ。ああ、大丈夫。いるいる。今はどうでもいいけれど。

一瞬、ものすごく寂しい

ことを考えてしまった。なんて悲しいんだろう。

と言っても……本当に、少ししかいなかったけれど。五人くらい……？ それでも十分なのかな。一人でも、十分なのかもね。狭く深く。僕はそれが好みらしいから。相手がどう思ってるかは知らないけれど、ただ単に、僕が勝手に好いて勝手に思っているだけ。行動を起こさなければ、口に出さなければ、その思いは相手に伝わらないけれど、その代り……拒絶されることもない。

心地いい距離を保ったまま、受け入れられることも、突き放されることもない。

理想だ。さめてるとか、そういうのは関係ない。僕はいつまでたっても受け身なままさ。僕が傷つくことがなくなるから。どうせなら楽に生きていたいじゃないか。

楽に生きたところで、何がどうなるわけでもないけれど。

あの世なんて信じてないし。辛いからってその人が本当に成長するかどうかなんてわかんないし。成長したつもりで痛い目見るのは嫌だな。うん。恥ずかしいよね、それは。たとえ誰かがそうなったとしても、僕は笑ったりしないけれど。

他人を笑えるほど、すごい人間じゃないから。そこまで自分を過信できないし。

なんてぐるぐる考えながら歩いていたら、大きな光がまじかに見えてきた。目を凝らしてみたら、それはどうやら街灯のようだった。今までも休憩所にはなかった、洒落た感じの街灯。

何気なく眺めながら歩いていたら、その街灯の下、木の背もたれつきベンチに腰かけている人を見つけた。

紳士風の、白っぽいグレーのスーツを着た初老の男性。スーツと同色の帽子には黒いリボンが巻いてある。ネクタイはスーツよりも濃い灰色。脇に置いてある紙袋っぽいのが気になるところだけれど、僕はそれよりも気になるものがあつたので、彼には軽い会釈だけを残して、また歩き出した。

僕はあの小さな光を見に行きたかった。

小さなくせに、なんでかとても強い輝きに魅かれる。

さっきも思ってたけれど、なんだかとても馬鹿らしい気がしないでもないけれど。もしかしたら罨かもしれない…とか考えたけれど、僕を罨に嵌めたところで誰に何の得があるんだろう。ないね。全く別に何かに秀でた人間ではないし。これから何かを究めようという志もないわけだし。

いい加減、自分も暇だな…とか思いながらも進むと、いきなり光が見えた。

もう驚いたというもんじゃない。一瞬、動けなくなった。あまりにも光が強くて、そして近くにあつて。

あの光のもとに行くには、もう少しだけ歩かなくてはいけない。だから僕は、小さな川の上にかかる木の橋を渡って、緑の小さな葉でできた門をくぐって、そこに行った。それは小さな遊園地。

ティーカップと動物を形どったもの、メリーゴーランド。なんだか、上に乗って遊ぶようなものしかない。しかもいい感じに風化していて、笑顔でいる動物たちが怖い。その中で輝く光は、恐怖の対象でしかない。

こんな寂しい場所で、しかもたった一人で、どうしてこんなにも輝いているのか。

それは気になったけれど、それよりも怖かった。

健気で、恐れを知らない、なのに可哀そうで悲しい、寂しそうな光が。怖い。

怖いから、一歩後ろに下がろうとした時だった。

ふ、と光が消えてしまった。

どうして消えたのか動揺した僕を残し、そこは真つ暗闇になったんだ。向こう側の大きな光。その作る影が、小さな遊園地を墓場のように演出する。緑の門は朽ち果てたようにしか見えず、必死に走った木の橋は、黒く流れる川に捕われまいとする僕を転ばせようとするように、大きく小さく隆起していた。

それでも走った僕の前に、あの大きな光が姿を見せる。

そこはあの街灯のある、ベンチの休憩所。

そんな事などお構いなしに走り抜けて、またあの人たちの流れに帰ろうと思っていた僕の目の前に、ゆつくりと初老の男性がたつた。まるで、僕がそこで立ち止まってしまつたのを知っていたかのように。勢いに乗った僕に突き飛ばされるなんて考えもしていない行動。そして彼は、いきなり、僕に、拳銃の銃口を向けた。

あまりのことに絶句する僕に、彼は銃口を向けるだけ。あの袋の中に入ってたのだらうと思う。

無言のまま、時間が過ぎて、銃口はその間ずっと僕を狙い続ける。しかしどうしてだろう。その時、僕は自分が殺されるなんて全く考えていなかった。

弾丸が放たれたとしても、死ぬことなんてない。

だから、十分に冷静になっていた僕は、それを避けた。足を少しだけずらして、首の横をすり抜けてゆく鉄の塊。それから、僕はひどく冷たい思考になっていた。

冷めていく感覚の中で、自分も拳銃を持っているということに、極普通に受け入れていた。その拳銃が、血だまりから拾ったかのように、血の滴るものだったとしても。

「どうして君は、そんな道徳的な行動ばかりとるんだね」

突然、その老人が僕に言った。木の陰に隠れた僕が彼の様子をうかがうと、彼は肩を緋色に染めていた。僕がやったんだと気づくと同時に、僕がやらなくてはいけないことも、悟ってしまった。良くも悪くも。

要は

苦痛の続く生よりも、何も残らない死を。そういうことなんだろう。

なぜ、それを成すのが僕でなくてはならないのか、それは疑問でしかなかったけれど、僕しか居ないのだから仕方がない。

僕は、躊躇することなく、撃った。

ちゃんと狙った通りに、彼の頭を撃ち抜いた。

けれども彼は倒れない。両腕を垂らし、うつ向いてしまっただけ。

血なんて流れてない。穴が開いているだけなんだと思う。

「これで罪から解放される」

彼の眩きが僕に届いた。同時に、彼の腕が攻撃的な光を放つ。露になった両腕には、びっしりと紋様か何かのような線が描かれていた。

それが罪の証なのだろうか。

僕がそう思った瞬間、その光は、僕を飲み込んだ。

目が覚めて、ぼんやりして、僕が携帯の時計を確認するまで、なぜか三十分の差があった。

夢の回想に、それだけの時間を使ってしまったのだ。幸い、遅刻に絡むような寝坊ではなかったから、僕は布団を少し整え、大きく伸びをする。

こんなに詳細を覚えている夢も久しぶりだ。

僕は顔を洗い、朝食を取った後、部屋に戻ってきて、制服に着替える。その間、また夢を思い出す。

あの初老の男性が、文字通りに両腕に抱えていた罪とはなんなのだろう。できれば話を、会話をしたかった。

そして、思った。

「罪なら、背負ってやっても良いや」

人が背負って許されるのは罪だけだと思うから。

罪を背負い、祝福を胸に抱いて、僕はいつもと変わらない生活を始める。

この退屈な日々に一瞬の変化をありがとう、夢。

なんて思いながら、僕は歯をみがきに、鞆を手にして部屋を出る。今日は生憎の曇り空だけど、夢と同じような薄暗さで良いじゃないか。

変わらない現実と、変化する夢。

その両方を、僕は行く。

終。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9812b/>

---

夢

2010年11月27日14時33分発行